

令和 7 年度
北九州市立看護専門学校
社会人入学試験

国 語 問 題 用 紙
(50 分)

<注意事項>

- 1 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
- 2 この問題冊子には、問題用紙が 17 ページまであります。
- 3 落丁・乱丁のある場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。
- 4 解答用紙には、受験番号と氏名・フリガナを忘れずに記入してください。
- 5 問題冊子は回収します。

受 験 番 号

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問8）に答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

（注1）漱石の何がそれほどまでに高学歴の青年たちを惹き付けたのか。漱石作品をどのように解釈すれば、彼らの関心を引き、満足感をもたらすのか。これらの疑問を解消する、漱石作品の入門書乃至は解説書を書いた人物がいる。それが小宮豊隆である。漱石門下の一員である小宮は「三四郎」のモデルとして有名だが、門下の中でもとりわけ漱石へのケイ⑦トウが強く、漱石への批判を一切許さぬ姿勢は「漱石神社の神主」と呼ばれ、文壇の内外問わず揶揄されたという。だが小宮は、漱石死後の全集出版に主導的な役割を果たし、漱石の名声が死後長く続くことに多大な貢献を果たした。また、その全集の各巻末に詳細な作品解説を付け、漱石の生涯と作品の意義とを結び付けた伝記『夏目漱石』（一九三八）を刊行する。これらの業績が漱石を知る入り口として有効に機能したからこそ、漱石が今日まで読み継がれているともいえる。小宮は優秀なスポーツスマンであると同時に、当時の読者たちが漱石の作品をどのように読み、解釈したか、その内実を現在に伝える貴重な証言者でもある。小宮の解説は当時の漱石読者たちの感動が言語化されて保存されたものである。つまり小宮の解説は、単に小宮個人の見解という以上に当時の読者たちの漱石への共通認識がまとめられたものと理解すべきである。

小宮の描く漱石像は概ね次のようなものである。幼き日に養子に出された後に再度生家に戻った経験や、英国留学時の神経衰弱の発症などで深刻な人間不信に陥った漱石は、創作に耽ること（ふけ）で我が身を見つめ、人間や社会に対する思索を深めていく。そして修善寺大患と呼ばれる臨死体験を経過して、より高次の精神的境地に近づき、作品世界は益々円熟味を増す。やがて辿り着いた「則天去私」と名付けるその境地を具現化する大作『明暗』の執筆にとりかかるが、無念にも志半ばで世を去る。残された我々は漱石の達した境地がどのようなものかを部分的に窺い知ることしかできず、その真意はそれぞれで探し求める以外ない。

この漱石像は一定の支持を受け、戦前の漱石研究にはその影響が濃く現れる。また、（注2）『三太郎の日記』のように、漱石の作品は大正期以降の哲学的思潮である教養主義乃至は人格主義と結び付けて捉えられる風潮が強かったため、例えば、滝沢克己の『夏目漱石』（一九四三）や岡崎義恵の『漱石と則天去私』（一九四三）など、この頃の漱石研究者は、漱石を作家というよりも一種の思想家と見なす傾向が強い。こうした理解が定着して普及することで、漱石の作品は一層高尚なものとして取り扱われ、特に教育界において必読の書とする空気が④ジョウセイされた。

以上のような経緯から、1 漱石はその死後、ある意味で「文学」の世界から少し離れた存在と認識されていた。阿部次郎や小宮豊隆の提唱

する漱石像は、文学的というよりも哲学や思想、さらにいうと宗教的な意味合いさえ感じさせるものとなっている。そのせいもあってか、大正後期から昭和前期の文壇の実力者たちは、漱石を「過去の作家」として扱っていた形跡がある。例えば、『文藝春秋』を主宰した菊池寛は昭和九（一九三四）年に「近頃は漱石の作品はあまり読まれていない」という趣旨の発言をしており、『国語と国文学』第一（巻第八号）、『新潮』の主幹を務めた中村武羅夫は昭和一七（一九四二）年に「最近の若い文学者で漱石に関心がある者は稀である」と述べている。そして、漱石に対して並々ならぬケイ[㊟]ボの念を抱いていた芥川龍之介^{あぐなわりゆうのすけ}も昭和二（一九二七）年に自死を選んでおり、文壇における漱石の影響力は低下していた。

そのため、漱石は大正期以降の「文学青年」からはそれほど大きな訴求力を持たない作家であつたと思われる。漱石を強く支持したのは、先述の通り、文学よりも哲学や思想に強い関心を示す「哲学青年」たちである。ところで、この「哲学青年」は学問全般に興味を抱く傾向があり、上記以外に科学や歴史にも関心を示した。こうした層の需要に応えたのが、漱石とも縁の深い岩波書店である。

岩波書店の創業者である岩波茂雄も漱石に私淑した門下の一人であり、事業の初期に漱石の『こころ』の自費出版に協力している（『岩波書店社史』では、社の処女出版と述べている）。岩波書店はそれ以降の漱石の作品を出版するほか、先述の『三太郎の日記』や、倉田百三の『出家とその弟子』（一九一七）など、大正教養主義に組み入れられる哲学的著作を扱うことで大正期に大きく成長する。また、古今東西の科学・哲学・歴史等に関する著作を広く扱う「岩波文庫」の企画が受け入れられることで、アカデミックな書物を扱う専門業者として出版界に確固たる地位を築くことに成功する。漱石はこの新興勢力の象徴的存在となり、漱石文学の普及と大正教養主義の隆盛、そして岩波書店の発展の三つが相乗効果を生み、それぞれの威信の上昇につながったと考えられる。

だがそれは必ずしもよいことばかりではない。漱石が岩波書店や教養主義と強く結び付くことで、それに批判的な勢力の注意を引くことにもなった。教養主義を標榜^{ひょうぼう}する、阿部次郎や小宮豊隆らは帝国大学の教授を占め、閉鎖的かつ排他的なアカデミズムを代表する存在として、批判の対象となることも多かった。そして彼らの著作を独占的に出版する岩波書店とは癒着関係があるように感じる者も少なくなかった。文芸評論家の亀井勝一郎は戦後、彼ら漱石門下の大正教養主義者たちの様相を総称して「岩波文化」と名付け、批判的に考察している（『現代人の研究』一九五〇）。この言葉は後に左翼系知識人への蔑称として用いられるようになるが、当時としても否定的なニュアンスが伴っていた。教養主義の象徴として祀^{まつ}り上げられた漱石は、

A

に教養主義の負の側面をも背負い込むことになった。教養主義と結び付いた漱石は、一部の学歴エリートのみを対象としたヘン[㊟]キョウな思想家といったイメージをつけられてしまう。戦前までの漱石は国民作家とい

うよりも、一部の層に熱狂的に受け入れられる、² 読者を選ぶ作家であつたという方が実は適切であつた。

戦前に隆盛した大正教養主義であつたが、戦後は開戦に至る過程でその抑止とならず、日和見的態度をとつたと戦後は批判されるようになる。戦前の思潮を反省し、新しい機運を求める思想界・言論界において大正教養主義は衰退し、その象徴とされた漱石の評価についても再検討が求められることになった（もつとも教養主義に基づくエリート学生たちの精神文化は、その後もしばらく引き継がれていく）。

こうした機運の中で³ 江藤淳の「夏目漱石」は書かれた。昭和三〇（一九五五）年に『三田文学』に発表されたこの論考は、小宮の漱石論で描かれた教養主義的漱石像を否定する。小宮に拠ると、修善寺体験以降の漱石は作品制作を通して思索を深めて悟達へと近づくとされる。ところが江藤に言わせると事態はむしろ逆で、晩年の漱石は作品を書くほど人間心理の醜さや業の深さに失望して疲弊消耗し、寿命をすり減らしていった。だが、そのように我が身を削りながら自身の内部に巢食う「我執」の姿を描出して、人間の暗部を白日の下に晒したことこそ漱石の功績であると、江藤は述べる。

江藤が漱石の作品の中で特に注目するのは、構成の難が指摘される『行人』（一九二二―二三）である。主要人物である長野一郎は漱石の分身と呼ぶべき存在であり、作中で彼が直面する自己と他者とが分かり合えないことへの苦悩と絶望は、まさしく漱石自身が味わつたものと見なし、その苦悩の果てに B に陥って自我が引き裂かれる一郎の姿は、近代の成立とともに確立した個人主義の抱える問題点そのものであり、漱石は日本の文学作品で初めてそれを的確に抽出した作家として、江藤は高く評価した。

しかし、江藤は漱石文学には多層性があり、その魅力を単一的に語ることはできないとも主張する。彼は「低音部」という概念を④エンヨウし、漱石の作品の基底には「則天去私」に通じる東洋趣味と海外留学を経て習得した英文学とが併存しており、それらが複雑に入り混じり、その時々で異なるかたちで現れることで多様な表情を見せるという。そこには小宮の説く教養主義的漱石像も含まれる。したがって、ある意味で江藤の論は小宮の説を包括して成立しており、両者を対極的に位置付ける必要は必ずしもない。江藤の論考がもたらした真の功績は、漱石に対する新しい見方を提示したことでなく、漱石には一つの見方に収斂できない多様な魅力があり、様々な見方が可能であることを示した点にあつたのではないか。小宮の提示した教養主義的漱石像は時代の潮流に乗って大いに隆盛したが、時代の変化と共にその魅力は減じていった。漱石文学の魅力は何か、その理由も時代の変化に対応する必要があつたのである。

漱石研究を^a俯瞰的な視点で見ると、小宮の漱石像から江藤の漱石像への転換は、時代に合わせた漱石像のモデルチェンジであつたと見なすことができる。教養主義全盛の大正期から昭和前期にかけては、小宮の説く漱石像が相応の説得力を持ち、それが熱狂的な支持を集めたか

からこそ漱石の文名は維持された。【I】意図せずその役割を担ったのが、当時まだ学生だった新進評論家の江藤であった。【II】その後しばらく漱石の研究史は、江藤の説を追従するように近代的知識人の孤独な内面の探求に焦点化される。【III】ここに至り小宮の提唱した「則天去私」^b神話には多くの疑義が提出され、その終焉^{しゆうえん}が囁かれるようになる。【IV】その先鞭^{せんべん}となった江藤の仕事は無視できない。【V】

だが、「則天去私」の境地に達した聖人だから偉大だと説いた小宮と比較して、日本文学史上初めて近代的知識人の孤独な内面を描いた作家だから偉大だと説く江藤は、漱石の偉大さを称える^{たた}その熱量という点で決して劣るものではない。つまり、江藤の登場以降も依然として漱石は「偉大な作家」として扱われ続けたわけであり、その偉大さを称える論理がすり替えられただけでもいえる。また、その論理が江藤によって文学的に純化されたことで、文学の世界における漱石の地位はより高まったと考えられる。漱石は戦後に至ってようやく「哲学青年」の元から「文学青年」の元へ返されたということもできよう。小宮の漱石観を過去のものとして、（その時点における）新しい時代の漱石像を江藤が提示したことで、漱石は時代を超えた作家となった。

（大山英樹^{ひでき}『漱石神話』の形成 大正史講義【文化篇^{へん}】より）

（注1）漱石 —— 小説家である夏目漱石（一八六七～一九一六）のこと。

（注2）『三太郎の日記』 —— 哲学者である阿部次郎（一八八三～一九五九）が書いた評論随筆集。

問1 二重傍線部㉠㉡の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

㉠ ケイトウ

- ① 意気トウゴウした
- ② 暑さのあまりソツトウした
- ③ 改札口にサツトウした
- ④ 容疑者がトウソウした
- ⑤ トウメイなガラス

㉡ ジョウセイ

- ① ワインをジョウゾウする
- ② 話がジョウチョウに流れる
- ③ 空気をジョウカする
- ④ ジョウキを逸する
- ⑤ 水分がジョウハツする

㉢ ケイボ

- ① メイボで確認する
- ② ボケツを掘る
- ③ ボシヨクが迫る
- ④ ボキンを呼びかける
- ⑤ ボジョウを抱く

㊦ ヘンキョウ

- | | | | | |
|---------------------|-------------------|--------------------|----------------------|------------------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 繁栄を <u>キョウ</u> ジュする | <u>キョウ</u> シヨウな敷地 | 占いが <u>キョウ</u> とでた | ゼツ <u>キョウ</u> マシンに乗る | <u>ヒキョウ</u> を旅する |

㊧ エンヨウ

- | | | | | |
|-----------------|----------------------|-------------------|--------------------|----------------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| <u>エン</u> ジンを組む | 甘いものを <u>ケイエン</u> する | 被災者の <u>キユウエン</u> | <u>エン</u> タイ料金を支払う | <u>エン</u> ギを担ぐ |

問2 二重傍線部 a、b の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

a

- | | | |
|------------------|-----------------|----------------|
| ① 広い視野で全体的に捉える視点 | ② 深く掘り下げて捉える視点 | ③ 様々な方面から捉える視点 |
| ④ 焦点を絞って捉える視点 | ⑤ 自分の思い通りに捉える視点 | |

b

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| ① 証拠がないのに合理的なものだと信じられていること | ② 裏付けがないのに必然的なものだと信じられていること |
| ③ 確証がないのに実在的なものだと信じられていること | ④ 根拠がないのに絶対的なものだと信じられていること |
| ⑤ 利得がないのに効率的なものだと信じられていること | |

問3 空欄 A 、 B を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|---------|---------|----------|-----------|----------|
| A | ① 陳腐なこと | ② 皮肉なこと | ③ 生半可なこと | ④ 分不相応なこと | ⑤ 不条理なこと |
| B | ① 自己顕示 | ② 自己暗示 | ③ 自己満足 | ④ 自己矛盾 | ⑤ 自己疎外 |

問4 次の一文を挿入する場所として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

しかし戦後を迎えて既存の価値観が揺らいだ時、漱石の文名を継続させるには教養主義との切り離しが必要となった。

- ① 【Ⅰ】 ② 【Ⅱ】 ③ 【Ⅲ】 ④ 【Ⅳ】 ⑤ 【Ⅴ】

問5 傍線部1「漱石はその死後、ある意味で『文学』の世界から少し離れた存在と認識されていた」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 大正期以降の哲学的思潮である教養主義や人格主義を標榜する作家を自認して、晩年は社会的に活躍していたから。
- ② 小宮による漱石像の影響もあり、「則天去私」の境地に至った漱石を一種の思想家として捉えるきらいがあったから。
- ③ 「則天去私」の境地を具現化する『明暗』の執筆途中で亡くなったため、未完の作家というイメージが強かったから。
- ④ 小宮がスポークスマンとなって教育界に強く働きかけることによって、学生たちの必読の書として定着していたから。
- ⑤ 個人が自由に楽しんで読むのではなく、当時の読者の漱石に対する共通認識に基づき読まなくてはならなかったから。

問6 傍線部2「読者を選ぶ作家であった」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 哲学や思想の最新の思潮を盛り込んだ小説であったために、一部のエリートだけが理解できる作家であったということ。
- ② 左翼系知識人を読者に想定して多くの小説が書かれており、文学青年の感性には合わない作家であったということ。
- ③ 戦前においては一般大衆が好む内容の小説を書いていなかったため、誰もが楽しめる作家ではなかったということ。
- ④ 教養主義的な「岩波文化」に批判的な大正期以降の「文学青年」を、読者として想定していなかったということ。
- ⑤ アカデミックな書物を扱う岩波書店や教養主義と結びついていたため、万人が読む作家ではなかったということ。

問7 傍線部3「江藤淳の『夏目漱石』」とあるが、これが書かれたことでどのようなことになったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 人間の暗部を白日の下に晒した作品を書いたと暗に揶揄しながらも、漱石文学の持つさまざまな魅力を集約することになった。
- ② 漱石の文名を高めるために意図的に教養主義を切り離したことにより、漱石の偉大さを文学的なものに純化することになった。
- ③ 日本文学史上初めて近代的知識人の苦悩を描いたと捉えることで、時代を超えた作家として漱石の地位を高めることになった。
- ④ 小宮の提示した漱石像を否定せずに踏襲することで、漱石が「哲学青年」から「文学青年」の元へと返されることになった。
- ⑤ 学生であった新進気鋭の評論家によって漱石の研究史の方向が変わったことで、アカデミックの権威が失墜することになった。

問8 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 漱石の作品の基底には、「則天去私」に通じる東洋趣味と独学で身につけた英文学を折衷したものが深く存在していた。
- ② 思想界や言論界において大正教養主義が衰退したことによって、エリート学生たちは哲学や思想を学ぶことがなくなった。
- ③ 江藤は、大正教養主義の象徴とされた漱石の評価を否定し、今までにない画期的な新しい見方を示したことで評価された。
- ④ 時代が変化すると共に、漱石文学がなぜ魅力的であるのかという理由が変化し、漱石研究も変わっていくことになった。
- ⑤ 小宮により漱石の業績や魅力が分かりやすく解釈されたのだが、漱石は今日まで読み継がれる作家にはならなかった。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～問8）に答えなさい。なお、設問の都合上、表記を改めたところがある。

類人猿の子ども特有の遊びに、ピルエットと呼ばれるものがある。

ピルエットとはぐるぐると回転することだ。この遊びはサルには見られず、類人猿にしか見られない。フランスの社会学者ロジェ・カイヨワが分類した四つの遊びの中で最も自由な、浮遊感に満たされ冒険的な緊張感に包まれる遊びで、類人猿が人間に進化するにつれてこの遊びは拡大し、ダンスという音楽的な才能と結びついていった。

私は「人類が直立二足歩行を始めた理由の一つに、この「踊る身体」の獲得があったと考えている。

かつて人類はジャングルを四足で歩行していたが、やがて二足歩行へと変化する。歩行様式が変わった理由として、二足のほうがエネルギー効率も良く、遠くまで食物を集めに行けたからという説と、安全な場所で待つ仲間の元へ栄養価の高い食物を運びやすかったからという、二つの説がこれまで有力だった。

しかし、私は別の考えを持っている。

四足で歩行すると手に力がかかり、胸にも圧力がかかって自由な発声ができない。しかし二足で立てば支点が上がり、上半身と下半身が別々に動くので、ぐるぐる回ってダンスを踊れるようになる。

また二足で立つと胸が圧力から解放されて、喉頭が下がり様々な声を出せるようになる。言葉を獲得する以前の、意味を持たない音楽的な声と、音楽的な踊れる身体への変化によって、共鳴する身体ができる。この身体の共鳴こそが人間の共感力の始まりで、そこから音楽的な声は子守歌となり、やがて言葉へと変化する。人間はそうやって共感力を高めながら、社会の規模を拡大していったのではないか。

『サピエンス全史』で知られる歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリは、ホモ・サピエンスが言葉を獲得し、意思伝達能力が向上したことを「認知革命」と呼び、種の飛躍的拡大の最初の一步と考えた。しかし私は「認知革命」の前に「共感革命」があったという仮説を持っている。

もし七万年前に言葉が登場したという説が正しければ、人類はチンパンジーとの共通祖先から分かれた七〇〇万年の中でわずかにパーセントの期間しか言葉を喋^{しゃべ}っていないことになる。その点を踏まえれば、まず身体があり、次に共感という土台があった上で言葉が登場したと考えるほうが自然だろう。

イギリスの霊長類学者ロビン・ダンバーは「社会脳仮説」を唱え、言葉は脳を大きくすることに役立っていないと指摘している。人類の脳

は二〇〇万年前に大きくなり始め、ホモ・サピエンスが登場する前に、すでに現在の大きさになっていた。あ 言葉が脳を大きくしたわけではなく、むしろ先に脳が大きくなり、その結果として、言葉が出てきたと考えられるのだ。

ではなぜ脳は大きくなったのだろうか。

ダンバーは人間の脳と、サルや類人猿の脳の大きさの違いについて、様々なパラメータを比較して検討した。その結果、大きな集団で暮らしている種ほど脳が大きいという事実を発見した。大きな集団で暮らせば、付き合う仲間の数が増える。自分と仲間、あるいは仲間同士の社会的な関係をしっかりと覚えておく必要がある。様々な場面で適切に行動できる。つまり社会の中で他者と交わるために、脳を大きくする必要があったと考えられるのだ。

い、脳が適応できる集団の人数にも限界はある。

時代によって脳のサイズは変化しているが、それぞれの時代の大きさから推定して、人類の平均的な集団人数を割り出すことができる。七〇〇万年前から五〇〇万年間は、現在のゴリラやチンパンジーと同じくらいの脳の大きさで、集団サイズは一〇〜二〇人程度だった。その後、脳が大きくなるにつれて適正な集団サイズは大きくなり、現代人の脳の大きさ（約一五〇〇cc）だと、一五〇人程度とされている。

人類が言葉の獲得に至った理由の一つは、脳の中の記憶を外に出すためだったのではないかと私は考えている。

人類が言葉を獲得する以前は、個人的な体験を仲間に伝えられなかった。しかし言葉という音声記号によって始めて伝えられるようになっていった。

今、私たちは文字を紙に書いたり、メールやSNSなどの伝達手段の発達により、個人の記憶を外部のデータベースへ移しやすくなった。アウトプットの手段が増えれば、いずれ会話は必要なくなるかもしれない。会話をしなくても記憶を自在に取り出せるようになり、記憶のすべてが脳の外にある状況が訪れる可能性すらありえる。農耕牧畜が始まった一万二〇〇〇年ぐらい前と比べると、現代人の脳は一〇〜三〇パーセント縮んでいるという説もあり、もしかすると今後、脳が不要となる時代が来るかもしれない。

さらに私たちは、考える力や判断力までAIに委ね始めている。人間は徐々にAな存在からBな存在になっている。

Bになれば、あらかじめ立てられたスケジュールに従って動くようになり、あらかじめ集められた情報に従って判断を下すのは当然だ、と考えるようになる。こうなれば、もう機械と同じである。

もっと大変なのは、²未来が過去に奪われ始めていることだ。AIは情報がなければ動けない。答えを出すときには、必ず過去の情報を分

析して未来を予想する。それはつまり過去に縛られているということだ。AIはゼロから一を生み出せないから、過去の出来事が未来をつくることになる。その未来のスケジュールに従って人間が動くのであれば、私たちはもう

A

に未来を描けなくなるだろう。

だからこそ、AIの裏をかい、過去を捉えなおす必要がある。過去を振り返り、かつての誤ったポイントで別の判断をしていたらどんな現在が見えるのか、そしてその現在の彼方^{かなた}にある、まだ起こっていない未来を新たに創造していく必要がある。

言葉には重さがないし、どこへでも持ち歩きができる。だから遠くにあって自分には体験できないこと、あるいは過去に起こってしまった体験のしようがない出来事を言葉によって自分のものにできる。現実にはないものも言葉によってつくり出せる。まさに

C

だが、

C

を信じることで、物語を共有できるようになり、一気に世界は広がった。

そもそも言葉は七万年前に突然出てきたものではないだろう。恐らく最初に生まれたコミュニケーションは、音楽的なコミュニケーションとは歌を唄うだけではない。身体でリズムをとり一緒に踊る行為も含まれる。私たちは会話をしているとき、身体を使って相手に同調している。相手の言っていることに頷き^{うなず}、顔や手などを動かしながらリアクションしている。言葉が当たり前になった今でも、私たちは身体を使ってコミュニケーションしているのだ。恐らく最初の頃の言葉は、意味を伝え合うものではなかっただろう。

もちろん言葉は意味を伝えることが重要な働きである。けれど同じ言葉でも、相手と自分の関係や、ちよつとした言い回しで意味は変わってしまう。些細な会話や何気ないメールのひとつで、相手に誤解されてしまった経験は誰にでもあるだろう。本来の言葉は、やはり肉声を伴って対面で行われていたはずで、言葉にできない要素こそが、とても重要な役割を果たしていたのだ。

音楽を拡張すれば、身振り手振りになり、マナーの問題にも通じてくる。相手を上目遣いで見るのか、見下ろすのか、それは言葉にも表れるし、関係によって態度も変わる。そうやって対面でのコミュニケーションは一つのリズムをつくる。食事も、どういう順番で、どのぐらいの時間をかけて相手と合わせながら食べるのか。これも一つの音楽的なリズムをつくっている例と言えるのではないか。

X

『社交する人間 ホモ・ソシアビリス』という著作もある劇作家の山崎正和^{まさかず}さんは「社交とはリズムである」と言っていた。そして「社交とは文化である」と考えていた。社交は言葉ではなく、身体^{からだ}の共鳴なのだ。

ホストが物語を紡ぎ、今日はこういう社交をしましょうとみんなに呼びかけて、人々が集まってくる。だけど参加する人たちは、物がもらえるから集まるわけではない。ホストの物語やリズムを共有するために集まるのだ。

う

文化やリズムは、茶道の中にもある。お茶の席で使う帛紗^{ふくさ}には、帛紗さばきと呼ばれる作法があるし、茶器をどのように扱うかという、身体の作法がある。その作法を演じる中で、ホストが考える身体の流れ、人々の付き合いが演出されて共有され、同じゴールに向かう人々の心をつににする。完成された社交は、言葉だけではできておらず、ホストの考える物語を身体で共有するところまで含まれるのだ。これは一種の音楽ともいえるもので、言葉を獲得する以前の人間の社交とは何かがよくわかる事例だろう。音楽的なリズムの共有によって、仲間意識が生まれるのだ。

本来その仲間は現代のような人口密度の高い一〇〇〇人、二〇〇〇人という数では成立しない。せいぜい一五〇人程度の顔見知りの間柄であることが不可欠だ。ただ人間は、都市を発展させ、一生懸命にこの関係性を拡大しようとした。スポーツやコンサートに集まる何千、何万人が、その試合に、あるいはコンサートに熱狂し、ときには会場でウェーブをつくったり、手を振ったりして身体を共振させようとする。その基礎となるのが、まさに身体を共鳴させる音楽的なコミュニケーションなのだ。

私がコンゴ（現在のザイル共和国）でゴリラの調査をしていた頃、現地ではいつも人々がリンガラ・ミュージックに合わせて踊り、歌う姿を見てきた。私もその輪の中に入り、共に踊った。簡単な踊り方のマナーがある他は、どんな踊りをしても自由で、これも社交の一つといえるだろう。

アフリカでもう一つ印象的だったのが、ピグミーと呼ばれる狩猟採集民だ。

彼らは^a天性の踊り子と呼ばれていて、実際に世界的な音楽祭で優勝したこともある。彼らの音楽は一人一音、ポリフォニー（多声的）で、いろいろな人たちがそれぞれ異なる「自分の音」を出し、その集合音が自然にメロディーになっていく。言葉を使わない音だけの音楽で、仏教の声明^{しょうみょう}に似ているかもしれない。太鼓でリズムをとり、輪になって足並みを合わせる。その輪の中で一人一人が^b即興で踊りを演じる。彼らは森の民なので、踊るときによく動物の真似^{まね}をする。ゾウの真似をしたり、身体で森の様子を表したりする。まさに身体で状況を知らせるコミュニケーションだ。森の中では獲物に気づかれてしまうから言葉を交わせない。だから口笛などでお互いに交信する。動物を呼ぶための様々な仕掛けもあって、草笛を吹いたり、三人一組ぐらいでチームを組んだりして狩りをする。こういう場所で言葉は全く意味をなさないと強く実感した。

野生のゴリラは音楽的な声だけで言葉を発しない。それでも彼らは体を使って、動きで会話し合っている。それが観察しているこちらにも伝わってくる。ゴリラは靴や服を身につけない。余計なものを身につけると、体での会話ができないからだ。だから彼らは裸でいる。なるほ

どと思った瞬間だった。

(山極壽一『共感革命 社交する人類の進化と未来』より)

問1 二重傍線部 a、b の類義語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- | | a | b |
|---|------|--------|
| ① | ① 身上 | ① 行雲流水 |
| ② | ② 出自 | ② 色即是空 |
| ③ | ③ 資質 | ③ 当意即妙 |
| ④ | ④ 英知 | ④ 緩急自在 |
| ⑤ | ⑤ 手腕 | ⑤ 電光石火 |

問2 空欄 あ へ う を補うのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① ただし ② むしろ ③ つまり ④ 例えば ⑤ あるいは

問3

空欄

A

B

C

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、

解答用紙に番号で答えなさい。

- | | | | | | |
|-----|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------------------|
| A・B | ① 絶対的・相対的 | ② 利他的・利己的 | ③ 感情的・理性的 | ④ 自律的・他律的 | ⑤ 有機的・無機的 |
| C | ① 虚構 | ② 神話 | ③ 修辞 | ④ 象徴 | ⑤ 詭弁 <small>きべん</small> |

問4

空欄

X

に入る〔1〕～〔5〕の文を正しく並べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答

用紙に番号で答えなさい。

- 〔1〕 その文化は言葉が登場する前につくられ、一五〇人以下の小規模な集団内で通用するリズムとして共有された。
- 〔2〕 私たちの日々の出会いや社交も、そういう身体の共鳴によってつくられているのだ。
- 〔3〕 人間が仲間と付き合うために持っているリズム感とは文化とも言えるだろう。
- 〔4〕 事実、ゴリラは言葉を喋れないが、群れとして一つの生き物のように動くことができるし、その能力は現代人も持ち合わせている。
- 〔5〕 そこに言葉は必要とされない。

- | | | | |
|---|-----------------------------|---|-----------------------------|
| ① | 〔2〕 ↓ 〔1〕 ↓ 〔5〕 ↓ 〔4〕 ↓ 〔3〕 | ② | 〔2〕 ↓ 〔3〕 ↓ 〔1〕 ↓ 〔4〕 ↓ 〔5〕 |
| ③ | 〔2〕 ↓ 〔5〕 ↓ 〔4〕 ↓ 〔3〕 ↓ 〔1〕 | ④ | 〔3〕 ↓ 〔1〕 ↓ 〔5〕 ↓ 〔4〕 ↓ 〔2〕 |
| ⑤ | 〔3〕 ↓ 〔5〕 ↓ 〔4〕 ↓ 〔1〕 ↓ 〔2〕 | | |

問5 傍線部1「人類が直立二足歩行を始めた」とあるが、このことにより人類はどのように変わっていったと筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 踊る身体を獲得したことにより、言葉を使えるようになり、今までよりも脳を大きくすることができるようになった。
- ② 大きな集団で暮らすようになったことにより、音楽的な踊れる身体を使用したコミュニケーションができるようになった。
- ③ 四足歩行のときはぐるぐる回るダンスしかできなかったが、身体全体を使ったダンスをすることができるようになった。
- ④ 言葉を獲得することによって、また、意思伝達能力を高めることで、はじめて共感力を持つことができるようになった。
- ⑤ 共鳴する身体を手に入れたことによって、共感革命を起こし、次いで認知革命をもたらすこともできるようになった。

問6 傍線部2「未来が過去に奪われ始めている」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① AIに判断を委ねるようになったことで、過去の焼き直しのような未来を人間は生きることになり始めているということ。
- ② AIは過去の出来事により未来をつくっているため、過去と同じ出来事しか起こらないことになり始めているということ。
- ③ AIは膨大な過去の情報に基づき未来を予想するので、人間の予想よりはるかに確実なものになり始めているということ。
- ④ AIによってあらかじめ立てられたスケジュールに従った行動が、人間にとり効率的なものになり始めているということ。
- ⑤ AIは現実にはないものをつくりだすことはできないため、現実によって制限を受けることになり始めているということ。

問7 傍線部3「社交は言葉ではなく、身体の共鳴なのだ」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 社交は物がもらえるから行う利己的なものではなく、すぐれて利他的な行為であるということ。
- ② 社交は仲間意識を持った者たちが同じ空間にいることにより生み出すことができるということ。
- ③ 社交は言葉を獲得する以前から行われている非常に原始的な人間の付き合いであるということ。
- ④ 社交は身体を介した音楽的なリズムの共有によって行うコミュニケーションであるということ。
- ⑤ 社交は一人ではできず、群れをなし集団を形成することによって行うことができるということ。

問8 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙に番号で答えなさい。

- ① 人間関係を円滑に保つには音楽的なリズムが必要なので、ダンスのマナーを身につけなくてはならない。
- ② エネルギー効率がよくて、仲間に食物を運びやすいので、二足歩行が始まったとする仮説が実証された。
- ③ 脳の大きさによって社会的な関係を結ぶことができる人数、つまり集団の大きさがおのずと決まってくる。
- ④ 言葉は自分の感情や考えていることを他者に伝える手段であるので、曖昧さをなくすことが必要である。
- ⑤ コンピュータが発明されたことにより、はじめて人間は脳の中の記憶を外部化することが可能になった。